

小説家の四季 二〇一六年 春

佐藤正午

今年二月、といってもつい先月のこと『小説家の四季』と題した新しい本が出版された。

これまでこの連載で書き溜めた文章を柱にして、一冊にまとめた久々のエッセイ集である。『ありのすさび』『象を洗う』『豚を盗む』に続く、あの「その日暮らし随筆」が、十年ぶりに帰ってきた——そんな謳い文句の広告も出た。広告について一言触れておくと、あの「その日暮らし随筆」と鉤括弧でくくられた部分の「その日暮らし」とは、貧乏な生活、というより長期計画性にとぼしい小説家のライフスタイル、みたいな意味なのだろうし、どっちにしても、仮に小説家の本意ではないとしても(ないのだが)、僕の書いたものが人にそう読めるのだとすれば、それはそれでかまわない。版元がどんなキャッチフレーズを押し出そうと、おかげで本を手にとってもらえるなら文句もない。

久々の一冊を世に送り出すため、昨年末から正月にかけて校正作業やあとがき執筆や作家としての務めを果たし、あとはその道の専門家を信頼し任せて、ようやく立派な、馬子にも衣装的な(これは古い言い回しを借りた謙遜だが)美しい装幀の本ができあがり、人がたぶん達成感とか呼ぶものを感じ

じて一と息入れているところへ、そろそろですよ、と編集者から本稿の締切が近づいたことを知らせる、毎度おなじみの原稿催促の電話がかかる。

原稿催促、といま書いてみると言外に催促される側の渋々感が滲み出るようで、ひよっとしておまへは逃げたがってるのか、編集者の「そろそろですよ」を借金の催促みたいに感じてるのか? と勘ぐられそうだがそうではなく、書く場所を与えられることに作家として不平不満のあるはずもない。原稿の催促は編集者の務め、編集者の催促は作家の生き甲斐。書いてよければいくらでも、いつまでも書かせていただきます。なんならあと十年でも二十年でも、毫碌するまで。相も変らぬ「その日暮らし随筆」でよければ。

で、一冊の本にまとまった昨年までの連載を仮にシーズン1と呼ぶなら、二〇一六年、ここから「小説家の四季」シーズン2のはじまりである。

気分一新、いきます。

エッセイ集『小説家の四季』刊行後まもなく、取材の申し込みがあった。

ほんとは、いま書き下ろしの小説にかかりきりでインタビュー取材に時間をさいている余裕はないんだけどな、それが本音だが、本音を通せば、せっかくのPRの機会を逃してどうするんです、本が売れないと困るのは正午さんですよ! と版元の編集者には怒られるだろうし、それ以前に、おまえ

は何様だ？といろんなところで反発も買うだろうし、いいことは何もない。ここは作家のマナーを優先して、喜んで引き受ける。

作家のマナーというのは、本音を押し包み、喜んでいて、依頼を引き受けてしまうことだが、面倒でもそこまでの段取りを踏めば、つまり喜んで作家の役を本気で演じ切れれば、役と役者は渾然一体となり、カレンダーに指定の日時を書き込みながら、その日を待ちかねている自分を見出すことになる。新聞に記事が載れば本のPRになるだろう。記事を読んだ近所の人には作家づらして挨拶できるだろう。引き受けてよかったな。さつきまであったはずの本音は遠くへ退き、ただの無精に思える。

待ちかねたその日、わざわざ佐世保まで取材にやって来てくれたのは、以前、長編小説『5』と『アンダーリポート』が出版されたときにも会ったことのある記者だった。今回のエッセイ集を、彼はなんと刊行の日に書店で買って読み始めたのだという。読み終えたとただちに取材申し込みの電話をかけたのだという。なかなかできることではない。言わせてもらえば、記者の鑑、のような人物である。もしくは、ご鼻屑さん、と呼びたいくらいの人である。しかも手土産持参で、待ち合わせの喫茶店には先に着いて待っていてくれた。非の打ちどころがない。

おまけにその人は、僕の退屈な話を辛抱して聞いてメモを取るだけでなく、エッセイ集の内容にかかわるエピソードをみずから披露してくれた。

「私も昔、記者さん、と人に呼ばれてムツとした憶えがあります」

とその記者(さん)は言った。そこで僕は飲みかけのコーヒーカーップを受け皿に置き、つい身を乗り

出して、

「いつ頃？」

「入社してまもない頃だから、二十年ほど前になりますかね。何の取材かは忘れましたが、会場に入ったなら、仕切りの人からいきなり、ああ、記者さんはこっち、と指図されて、その記者さんという呼びかけに、どうもあんまり歓迎されてないような、うさん臭い人間はそっちでおとなしくしてろ、みたいな含みを感じ取りました」

「ああそう」

「そうなんですよ。佐藤さんのエッセイ集のなかの「作家さん」の章を読んで、自分も似たような経験があると、当時のことを思い出しました」

「似てるね」

「はい」

「それでいまは？ いまは記者さんと呼ばれることはどうなの」

「いまは別に、なんとも」

「思わないよね？ そうだろうね。さんづけ全盛の時代だからね、いまは。記者さんも作家さんも普通に使うし、慣れてしまってるよね」

「慣れましたね」

これが何の話かわからない人のために要点を補足しておく。

エッセイ集『小説家の四季』に「作家さん」と小タイトルを付した文章があつて、そこに、一九八〇年代のあるとき、あるところである人に作家さんと呼ばれて侮辱されたと僕は感じた、という思い出話を書いているのである。作家さんの呼びかけを侮辱的に受け取った当時の僕の語感には、おそらくどう説明しても現代の読者には伝わらないだろうな、と半分気合い抜けしながら。なぜなら、いまでは作家を作家さんと呼んでも誰も気にしないし、どんな職業、立場の人間にもさんをつけて呼ぶのがあたりまえの時代だから。仮に「馬子」という職種が現代に生きていたら必ず「馬子さんにも衣装」と言われるはずの時代だから。

が、伝わる人にはちゃんと伝わっていたわけだ。作家さんと呼びかけられて若い僕がカチンときたように、記者さんと呼ばれた彼もムツとした憶えがある、と証言しているわけである。二十年ほど前の出来事というのだから、これは一九九〇年代中盤、少なくともその頃までは、むやみやたらにさんづけの呼びかけは（あるいはすでに優勢だったのかもしれないけれど）日本中くまなく制圧してはいなかった、数少ないながらも抵抗勢力は存在した事実を示している。

しかし、というか、そして、というべきか、誰のどんな抵抗も虚しかった。二〇一六年現在、記者さんと呼ばれても「いまは別に、なんとも」と彼は答えるわけだし、僕も同様に、いつどこで作家さんと呼ばれても「はい、何か御用で？」と応じる心の準備はできている。いまでは、日本語を喋っている人は全員等しく制圧されている。制圧だの、抵抗だの、いったいどこの独裁者の話をしてるんだよ？とよく事情が呑み込めない人も、別にあわてる必要はない。さんづけの統治下で、僕もあなた

も記者さんも、みんな安心してこの時代を暮らしていける。とにかく何にでもさんをつけておけば丸くおさまる。

エッセイ集刊行から間を置かず、佐世保まで出向いてくれた記者(さん)はもうひとりいて、そちらは昔、長編小説『彼女について知ることのすべて』が本になったときにも取材に来たという人だった。駅で待ち合わせて会ってみると、この人も地元の名産品を手土産にぶらさげていた。ひよつとして巷で、取材時に手土産持参が流行の兆しなのか。土産代は自費なのか経費なのか。

ま、それはどうでもいいが、『彼女について知ることのすべて』が本になった年から数えてみると二十一年ぶりだから、相手の顔も名前も当然、憶えていない。むこうだって取材した事実が記憶にあるのみで、自分で書いた記事の内容も憶えていない。おたがい率直にその点を認め合ったあと、行きつけの喫茶店でインタビューが始まり、途中で、僕の凡庸な受け答えに飽きたのか、もともと饒舌なたちなのか、その人は事前にメモを書き込んで準備してきた取材ノートを閉じると、自分から喋り出した。

「私がいちばん感服したのは、エッセイ集の巻頭にある「冷蔵庫理論」の話なんですよ。これはよくできた理論ですね。実を言えば、私には母の思い出がないんです、父の思い出となると数々あるんですが、私の幼少時代の思い出のなかに母はいない。母は自宅で商売をやっていて、始終一緒にいたはずなのに、特にこれといった思い出の場面が浮かばない。なぜなんだろうと、前々から不思議に思

つてたところが、佐藤さんの発案されたこの冷蔵庫理論を読んで腑に落ちました。いつぺんに謎が氷解しました。つまり、始終一緒にいたからなんです、そのために、逆に、子供の頃の私には母が見えていなかった。父の場合は、たまに仕事から帰ってきて説教垂れたりするから強い印象として残るでも常にそばにいた母の行動は、私は見ているようで見ていなかった、毎日見慣れた冷蔵庫のなかの食品を見過ごすように。そういうことだと思っくんですよ」

「……なるほど。そうなんですかね」

「そうに違いありません。冷蔵庫理論、これすごい理論ですよ、もつと世間に広めるべきだと私は思いますよ」

まあ、世間に広まるのはかまわないけれど、ただし(詳しくはエッセイ集収録の文章を読んでいただくとして)僕が発案した冷蔵庫理論というのは、小説のゲラの推敲時における避け難い現象、その現象の起きる謎を解明した理論なのである。でも本人が「そうに違いありません」と強調するのだから、もしかしたらそうなのかもしれない。人間の幼少時代の記憶に関しても応用可能な理論なのかもしれない。そのへんは読者各人の判断でどうぞ、としか言えない。

それからあと、この記者のお喋りは止まらなくなった。

冷蔵庫理論から、どこをどう飛び伝ったのか、いつのまにか「実はですね、先日、通勤電車に乗るさい嫌な出来事にごつかりましてね。いや、こんな私的な話、お聞かせするのもなんです」が、もはや語る気満々の、まるで一編の物語が用意されたような事態になっていて、どっちがインタビュー

してるんだよ?」と思いつつも、聞いてみるとそれはそれで興味深い話だったので、三十分ほど耳を傾けてしまった。途中からスマホのメモアプリでメモも取った。黙って聞いているうちに、書きかけの小説のどこかの場面に使えそうな予感がしたからである。

そんなこんなで、今回の取材は二件ともに、喜んで引き受けた甲斐があった。記事が出ると本の宣伝になる、さんづけの侵攻に対して僕以外にもぎりぎりまで抵抗していた同志がいた事実も判明する、頼みもしないのに小説のヒントになりそうな私的な話まで聞かされる、そのうえお土産もふたつ貰う、これが本来取材というものなら、書き下ろしの小説などほっといて毎日取材を受けた方がいい。と、なかば本気で思ったくらいで、いま次の取材依頼を待っているところである。